研究雑話 (34)

フランスの障害者教育・福祉事情(十八)：諸結果(六)、生活のわざ、聞き上手は確かめ上手。

藤井力夫

前回は、生活教育とは何か、「もののあり方、使い方」、これをめぐってお話しました。今回は「教科学習」についての考え方を日仏比較の結果からお話したいと思います。「こくご」とか「算数」とか教科が先にあるのではありません。これは日本でもフランスでも同じ。まずなによりも生活のなかでのさまざまな経験が大事。「トンボ」一つ例にとっても、なかなか捕まえられないトンボ。お兄ちゃんに捕ってもらったトンボ。小川や野原、網やかご。その人なりの経験が「トンボ」や「網」ということばに整理されています。「ことば」で整理する営み、これを「勉強」とみなしてよいでしょう。

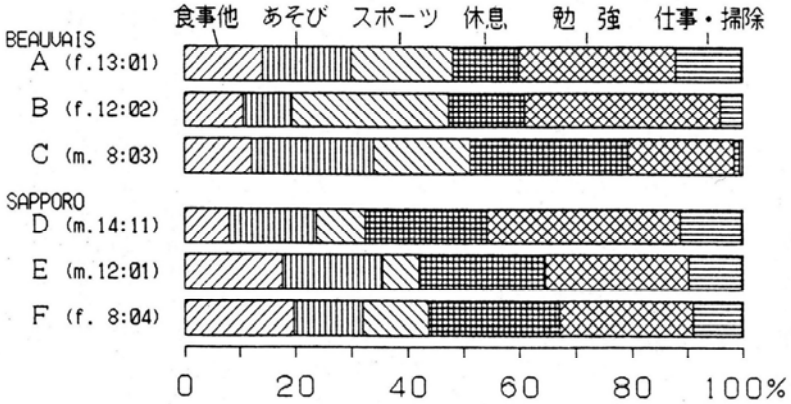
図Aは、何をどうしているか、五分毎にチェックした行為の結果を、活動内容の種類、食事、遊び、スポーツ、勉強等で分類、集計したもの。日本の場合、時間割では教室での「勉強」が多いように思われますが、実際には不可能。五分毎の主だった行為で分類しても、学校にいる総時間の二〇%から三五%ぐらいです。ボーベ(仏)、札幌(日)両養護学校ともこの傾向は同じ。どう集中できるか、これに至る時間の使い方が問題。フランスでは身体を動かすスポーツが多く、これに該当する日本の活動は廊下でのぼんやりを含む「休息」。事実として反省しなければなるまい。

では、「勉強」の中身。図Bと図C。前者は造ったり、描いたり実際の行為の割合比較。後者はその時何を見ていたか、関心を向けていた対象、人や事物についての集計結果。何だろうと定位する対象は、誰かがしている何かである場合が多いから、当然人にも物にも重複する(計二〇〇%)。

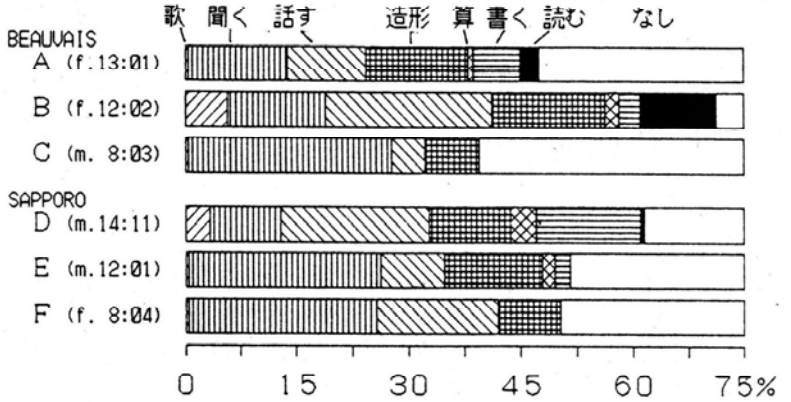
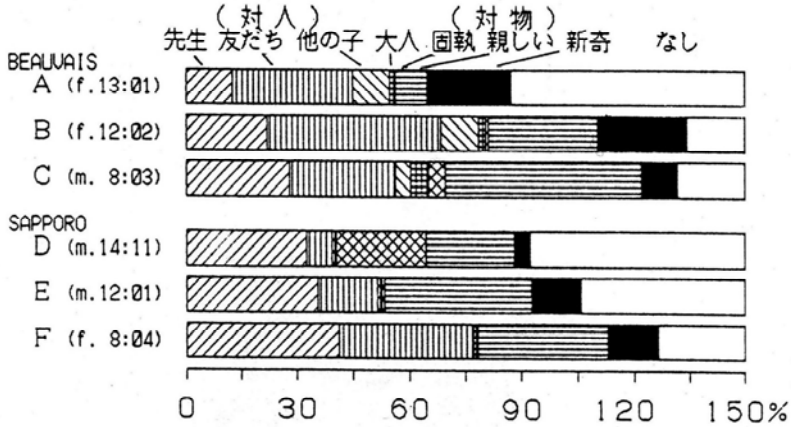
まず、勉強の内訳。行為の実際から「造形」「読み書き」「算」の三つに分類。はじめての分け方だが的確。これに「歌う」「聞く」「話す」がオーバーラップ。「教科」とは何か、この問に対する最も素直で実態にあった回答だと思います。聞くこと話すこと、このバランスがとれている子どもほど、描いたり確かめたりするその内容が高い。図Cの定位対象との関連で言えば、新しい「違い」に気づく子どもは、友だちのしていることに関心を向けている。先生のみならず友だちのしていることに関心があります。先生自身の語り聞かせの上手如何が、子どもたちにおける聞き上手、確かめ上手を作っている。そう言ってよいでしょう。調査した人間が感じる一つの事実です。

(北海道教育大学教授)

図A. 一週間の活動内容内訳



図B. 勉強に該当する項目内訳



図C. 定位対象(関心を向けている対象)